

がつがくいんふくいんか だい か  
3月学院福音化、第1課

## 1課 ヤコブとイスラエル（創世記32:28）

がつがくいんふくいんかだい か  
3月学院福音化第1課ヤコブとイスラエルです。創世記32章 28節を読みます。

その人は言った。「あなたの名は、もうヤコブとは呼ばれない。イスラエルだ。あなたが神と、また人と戦って、勝ったからだ。」

・ヤコブ  
かかとをつかむ者  
・イスラエル  
かみ きそ かみ たたか  
神と競う、神と戦う

ヤコブという名前がイスラエルに変わるようになります。ヤコブという名前の意味は創世記25章にあります。「かかとをつかむ者」という意味です。そして、イスラエルという名前は、神様と競う、神様と戦う、このような意味です。名前その意味が大きく重要なものではありません。その名前を通して、神様が何を私たちに現わそうとしてくださっているのかを見ることができなければなりません。

まず、ヤコブという名前で見分けるように（皆さんがよく知っている内容でしょうが）ヤコブは常に自分自身だけのために他の人々をだます者として生きていました。兄もだまし、父もだまして、叔父もだましました。そして、叔父をだまして多くの財産、また、利益を得たり、兄のエサウからは煮物一杯で長子の権利を奪うことによって、父からすべての祝福を受けました。

ヤコブが胎内にいたときの内容を一度見てみましょう。

創世記25章 23節から 26節

23 すると主は彼女に言われた。「二つの国があなたの胎内にあり、二つの国民があなたから分かれる。一つの国民は、もう一つの国民より強く、兄が弟に仕える。」

24 月日が満ちて出産の時になった。すると見よ、双子が胎内にいた。

25 最初に出て来た子は、赤くて、全身毛皮のようであった。それで、彼らはその子をエサウと名づけた。

26 その後で弟が出て来たが、その手はエサウのかかとをつかんでいた。それで、その子はヤコブと名づけられた。イサクは、彼らを生んだとき、六十歳であった。

胎内からこの双子がずっと戦ったのです。イサクとリベカが、これはどうしたら良いかと祈ったところ、神様のみことばが語られました。そこで、胎内にいる二人の子どもが二つの国で、二つの国民となると言われ、兄が弟に仕えると言われました。

これについてローマ人への手紙でパウロが記録をした内容があります。

ローマ 9 章 10 節から 13 節です。

10 それだけではありません。一人の人、すなわち私たちの父イサクによって身ごもったリベカの場合もそうです。

11 その子どもたちがまだ生まれもせず、善も悪も行わないうちに、選びによる神のご計画が、

12 行いによるのではなく、召して下さる方によって進められるために、「兄が 弟 に仕える」と彼女に告げられました。

13 「わたしはヤコブを愛し、エサウを憎んだ」と書かれているとおりです。

パウロは神様がエサウではなく、ヤコブを選んだ理由をこのように説明をしているのですが、彼らが生まれる前にすでに「わたしはヤコブを愛し、エサウを憎んだ」とこのように表現をしています。このような神様の選択は、人間の行いがあるか、ないかで変わるのではないということ言うのです。完全に神様のみこころと計画によってなるということです。

13 節に「わたしはヤコブを愛し、エサウを憎んだ」この「愛し…憎んだ」というのは過去形です。それで、すでに生まれる前に、創造の前、永遠の前に、そのように選択したということ言われているのです。このヤコブとエサウの話は、結局、神様の民と神様の民でない者の選択と召しがどういふことを説明するためのものです。

パウロがローマ人への手紙でこれを引用したのは、マラキ書にあった内容を引用したのです。

マラキ書 1 章 1 節から 3 節を見ましょう。

01 宣告。マラキを通してイスラエルに臨んだ主のことば。

02 「わたしはあなたがたを愛している。——主は言われる——しかし、あなたがたは言う。『どのように、あなたは私たちを愛して下さったのですか』と。エサウはヤコブの兄ではなかったか。——主のことば——しかし、わたしはヤコブを愛した。

03 わたしはエサウを憎み、彼の山を荒れ果てた地とし、彼の相続地を荒野のジャッカルのものとした。

ヤコブを愛して選ばれた、エサウは憎んだと言われます。この話を今、だれに言われておられるのでしょうか。「イスラエルに」と言われています。ヤコブ、すなわち、イスラエル、神様の選択によって愛を受けた者に今語っておられるのです。しかし、イスラエルは何と言うでしょうか。

「神様が私たちを愛されたのが、どのように現れましたか」と反問しています。その話を、エサウとヤコブを対照して話をしておられるのです。

1 節から 3 節までは、ヤコブとエサウとに対する話ですが、4 節、5 節には、エドムとイスラエル民族に分けて話をされています。

マラキ 1:4-5

04 たとえエドムが、『私<sup>わたし</sup>たちは打ち砕<sup>う</sup>かれたが、<sup>はいきよ</sup>廃墟<sup>た</sup>を建て直<sup>なお</sup>そう』と言<sup>い</sup>っても、——万軍<sup>ばんぐん</sup>の主<sup>しゅ</sup>はこう言<sup>い</sup>われる——彼<sup>かれ</sup>らが建てても、わたしが壊<sup>こわ</sup>す。彼<sup>かれ</sup>らは悪<sup>あく</sup>の領地<sup>りょうち</sup>と呼ば<sup>よ</sup>れ、主<sup>しゅ</sup>がとこしえに憤<sup>いきどお</sup>りを向<sup>む</sup>ける民<sup>たみ</sup>と呼ば<sup>よ</sup>れる。

05 あなたがたの目<sup>め</sup>はこれを見<sup>み</sup>る。そして、あなたがたは言<sup>い</sup>う。『主<sup>しゅ</sup>は、イスラエル<sup>ちざかい</sup>の地境<sup>こ</sup>を越<sup>こ</sup>えて、なお大<sup>おお</sup>いなる方<sup>かた</sup>だ』と。』

1節から3節でヤコブとイスラエルの選<sup>せんたく</sup>択<sup>あ</sup>いと愛<sup>にく</sup>と憎<sup>せつ</sup>むこととしたのを、4節から5節では、エドムとイスラエルという国<sup>くに</sup>で表<sup>ひょうげん</sup>現<sup>えん</sup>をしながら、選<sup>せんたく</sup>択<sup>あ</sup>いと遺<sup>い</sup>棄<sup>き</sup>として分<sup>わ</sup>けて語<sup>かた</sup>っておられます。

ですから、ヤコブからイスラエルに名<sup>な</sup>前<sup>まえ</sup>が変<sup>か</sup>わったことは、それほど大<sup>おお</sup>きな意<sup>い</sup>味<sup>み</sup>はなく、神<sup>かみさま</sup>様がなげヤコブ、イスラエルを選<sup>えら</sup>ばれたかに対<sup>たい</sup>して、焦<sup>しょうてん</sup>点<sup>あ</sup>を合<sup>あ</sup>わせるべきでしょう。すでに創<sup>そうぞう</sup>造<sup>ま</sup>え前<sup>まえ</sup>に神<sup>かみさま</sup>様が愛<sup>あい</sup>して選<sup>えら</sup>ばれた神<sup>かみさま</sup>様の民<sup>たみ</sup>がいるということでしょう。その民<sup>たみ</sup>のことをイスラエル、ヤコブだ<sup>ひょうげん</sup>と表<sup>ひょうげん</sup>現<sup>えん</sup>をしているだけなのです。

私<sup>わたし</sup>たちがしたことは何<sup>なに</sup>もありませんが、事<sup>じじつ</sup>実<sup>じつ</sup>、ヤコブはいつもだま<sup>もの</sup>す者<sup>もの</sup>でした。肉<sup>にく</sup>的<sup>てき</sup>に、人<sup>にんげん</sup>間的<sup>てき</sup>に見<sup>み</sup>れば、兄<sup>あに</sup>のエサウのほうがはるかに立<sup>りっぱ</sup>派<sup>じんぶつ</sup>な人<sup>おとこ</sup>物<sup>ぶつ</sup>でした。男<sup>おとこ</sup>らしくて、親<sup>おや</sup>のこ<sup>こ</sup>とばもよく聞<sup>き</sup>く親<sup>おや</sup>孝<sup>こう</sup>行<sup>こう</sup>な者<sup>もの</sup>でした。ヤコブはどうだったでしょうか。いつも、うそばかり言<sup>い</sup>って、だましました。しかし、そのようなことは重<sup>じゅうよう</sup>要<sup>よう</sup>なのでなく、ど<sup>にんげん</sup>んな人<sup>おこな</sup>間の行<sup>ど</sup>いや努<sup>ねっしん</sup>力<sup>りき</sup>、熱<sup>が</sup>心<sup>い</sup>さ、外<sup>がい</sup>見<sup>けん</sup>的<sup>てき</sup>なこと、人<sup>じんかく</sup>格<sup>かく</sup>、性<sup>せい</sup>格<sup>かく</sup>、こ<sup>かんけい</sup>うい<sup>い</sup>もの<sup>もの</sup>と関<sup>かんけい</sup>係<sup>けい</sup>なく、神<sup>かみさま</sup>様が神<sup>かみさま</sup>様の<sup>かみさま</sup>み<sup>かみさま</sup>こ<sup>こ</sup>ろによ<sup>よ</sup>って選<sup>せんたく</sup>択<sup>あ</sup>された者<sup>もの</sup>は愛<sup>あい</sup>を受<sup>う</sup>けるよ<sup>よ</sup>うになるのです。

きょうよ 今日<sup>きょうよ</sup>読<sup>よ</sup>んだ32章<sup>しやう</sup>以<sup>い</sup>降<sup>こう</sup>を見<sup>み</sup>れば、ヤコブが自<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>の以<sup>い</sup>外<sup>がい</sup>のこ<sup>こ</sup>を考<sup>かんが</sup>えな<sup>い</sup>、自<sup>じ</sup>己<sup>こ</sup>中<sup>ちゅう</sup>心<sup>しん</sup>的<sup>てき</sup>な内<sup>ない</sup>容<sup>よう</sup>がさ<sup>さ</sup>らにた<sup>た</sup>くさん出<sup>で</sup>てき<sup>ま</sup>す。20年<sup>ねんかん</sup>間<sup>かん</sup>、叔<sup>おじ</sup>父<sup>い</sup>の家<sup>いえ</sup>にいて、妻<sup>つま</sup>も4人<sup>にん</sup>もいて、それ<sup>それ</sup>から財<sup>ざい</sup>産<sup>さん</sup>といろいろな多<sup>おほ</sup>くのこ<sup>こ</sup>を<sup>え</sup>得<sup>も</sup>て持<sup>で</sup>って出<sup>で</sup>て来<sup>き</sup>ます。子<sup>こ</sup>どもも11人<sup>にん</sup>もでき<sup>い</sup>ましたし、いろい<sup>いろ</sup>んな財<sup>ざい</sup>産<sup>さん</sup>を<sup>え</sup>得<sup>ひつじ</sup>て羊<sup>ひつじ</sup>、牛<sup>うし</sup>、家<sup>か</sup>畜<sup>ちく</sup>、そ<sup>そ</sup>うい<sup>い</sup>うもの<sup>もの</sup>を<sup>つ</sup>連<sup>で</sup>れて出<sup>で</sup>るよ<sup>よ</sup>うに<sup>な</sup>りました。と<sup>と</sup>ころが、兄<sup>あに</sup>に会<sup>あ</sup>いに行<sup>い</sup>くのが恐<sup>おそ</sup>ろしいのです。兄<sup>あに</sup>に殺<sup>ころ</sup>されるかと思<sup>おも</sup>って。それ<sup>それ</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>え、自<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>の財<sup>ざい</sup>産<sup>さん</sup>と家<sup>か</sup>族<sup>ぞく</sup>を二<sup>ふた</sup>つに分<sup>わ</sup>けて、別<sup>べつ</sup>々<sup>べつ</sup>に送<sup>おく</sup>るよ<sup>よ</sup>うに<sup>な</sup>ります。も<sup>も</sup>しかしたら、先<sup>さき</sup>に送<sup>おく</sup>った財<sup>ざい</sup>産<sup>さん</sup>と家<sup>か</sup>族<sup>ぞく</sup>がなくな<sup>な</sup>っても、残<sup>のこ</sup>りはどうにか逃<sup>のが</sup>れるだ<sup>だ</sup>らうとい<sup>い</sup>う考<sup>かんが</sup>えだ<sup>だ</sup>ったので<sup>で</sup>しょう。そ<sup>そ</sup>して、す<sup>す</sup>べてを<sup>を</sup>送<sup>おく</sup>ってヤ<sup>や</sup>ボク<sup>ボク</sup>川<sup>川</sup>の渡<sup>か</sup>し<sup>わ</sup>場<sup>ば</sup>で一<sup>ひとり</sup>人<sup>にん</sup>で残<sup>のこ</sup>るよ<sup>よ</sup>うに<sup>な</sup>ります。そ<sup>そ</sup>して、一<sup>ひとり</sup>人<sup>にん</sup>で残<sup>のこ</sup>ったとき、御<sup>み</sup>使<sup>つか</sup>いが現<sup>あら</sup>わ<sup>わ</sup>れて格<sup>かく</sup>闘<sup>とう</sup>する、そ<sup>そ</sup>のよ<sup>よ</sup>うな場<sup>ば</sup>面<sup>めん</sup>が<sup>で</sup>出<sup>く</sup>て来<sup>く</sup>るで<sup>で</sup>しょう。そ<sup>そ</sup>の場<sup>ば</sup>面<sup>めん</sup>を、私<sup>わたし</sup>たちが最<sup>さい</sup>後<sup>ご</sup>ま<sup>ま</sup>で神<sup>かみさま</sup>様に願<sup>ねが</sup>って、祈<sup>いの</sup>って<sup>い</sup>すが<sup>が</sup>れば、神<sup>かみさま</sup>様が聞<sup>き</sup>き入<sup>い</sup>れら<sup>ら</sup>れると<sup>と</sup>い<sup>い</sup>うよ<sup>よ</sup>うに理<sup>り</sup>解<sup>かい</sup>しては<sup>は</sup>な<sup>な</sup>り<sup>り</sup>ま<sup>ま</sup>せん。「自<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>ひ<sup>ひ</sup>と<sup>と</sup>り<sup>り</sup>生<sup>い</sup>き<sup>き</sup>延<sup>えん</sup>び<sup>び</sup>よ<sup>よ</sup>うと、最<sup>さい</sup>後<sup>ご</sup>ま<sup>ま</sup>で<sup>で</sup>あ<sup>あ</sup>が<sup>が</sup>い<sup>い</sup>て<sup>て</sup>い<sup>い</sup>る」そ<sup>そ</sup>のよ<sup>よ</sup>うな<sup>う</sup>姿<sup>すがた</sup>と<sup>と</sup>して<sup>して</sup>見<sup>み</sup>る<sup>る</sup>べ<sup>べ</sup>き<sup>き</sup>で<sup>で</sup>す。結<sup>け</sup>局<sup>きよく</sup>は、私<sup>わたし</sup>、自<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>中<sup>ちゅう</sup>心<sup>しん</sup>で<sup>で</sup>す。

ところで、それが他の人々でなく、それこそ、私と皆さん、私たちだということです。私がい  
のちを生かそうと、私の利益を得ようと、神様にまで挑もうという、そのような私たちの悪い  
性格を見ることができるでしょう。そこでは、格闘に勝ったという形に表現されていますが、  
神様が負けてくださったのでしょうか。あわれだから、神様が目に見てくださったのでしょうか。

このように、ヤコブ、イスラエルの名前の意味するところが重要なだけでなく、ほんとうに大した  
ことがない者、神様とも戦ってみようと善悪の知識の実を食べたアダムのように企てる人間であ  
る不可能な私たちを、神様が「みこころの良しとするところにしたがって」選んで神の子どもと  
してくださった、その救いに焦点を合わせて考えるように願います。

エペソ1章4節から5節に、このように記録されています。

04 すなわち神は、世界の基が据えられる前から、この方であって私たちを選び、御前に聖な  
る、傷のない者にしようとされたのです。

05 神は、みこころの良しとするところにしたがって、私たちをイエス・キリストによってご自分  
の子にしようと、愛をもってあらかじめ決めておられました。

働き人メッセージでも言われていましたが、すべての人間が罪人であり、原罪によって神様を離  
れた者です。すでに死んでいる者で、その死の日を待っている者です。みな滅亡に至るしかない  
人間であるのにもかかわらず、ある群れに、ただ価なしに神様の愛が与えられるのです。それを  
私たちの側から、神様が公平だ、不公平だ、そのように見ることはできないでしょう。エペソ1  
章5節で言われているように、「みこころの良しとするところにしたがって」神様自ら、そのよう  
に選択されたと言われています。前に見たローマ9章11節でも「選びによる神のご計画」と言われ  
ています。そのように、ヤコブを愛されて、選ばれたのです。

ヤコブとイスラエルという名前を通して、その中に入っている私を見るべきですし、そういう私  
に神様のどんな愛が注がれていて、神様の選ばれた民になったのか、私たちはそこに感謝すべき  
でしょう。救いも恵みで与えられたことですから、私たちが私たち自らを自慢することは何も  
ありません。

最後にエペソ2章8節から9節を結論として読んで終えます。

08 この恵みのゆえに、あなたがたは信仰によって救われたのです。それはあなたがたから出たこ  
とではなく、神の賜物です。

09 行いによるものではありません。だれも誇ることのないためです。

もう一度、最後に言います。

ヤコブを通して、そして、イスラエルを通して、私がどのように神様の選ばれた民族になったのか、どのように霊的なイスラエルとして生まれ変わることになったのか、どのように私のような者が救われようになったのか、その神様の愛を悟ることができますように。

神様に申し訳ないですが、常に私の救いが、神様のみこころの良しとするところにしたがって与えられたことを知って、神の国を望み、そして、味わって生きようになることを願います。